

保育園・小学校における津波からの避難の事例分析

Case Analysis of Evacuation from the Tsunami at Nursery and Elementary Schools

水田恵三¹

Keizo MIZUTA¹

¹尚綱学院大学総合人間科学部

Faculty of Comprehensive Human Science, Shokei Gakuin University

We investigated evacuation behaviors at four sites in the affected areas in Miyagi prefecture and Iwate prefecture. I went to the site directly after the earthquake everything and asked a story from the responsible person. After analyzing 4 cases, we comprehensively compare 4 cases to compare whether there was prior training, whether we assumed a tsunami beforehand, seeking evacuation route, existence of leadership of facility chief, presence of cooperation of local residents. In the four cases covered this time, both preliminary preparations, evacuation plans, leadership, change of plans with a rewarding move, collaboration with local people who emphasized regional nature were all excellent.

Keywords : evacuation behavior, prior training, leadership

1. 目的

東日本大震災(2011年)から7年余が経過して、今だ復興の途上にあるとはいえ、宮城県と岩手県では多くの被災地は住宅に関しては整いつつある。震災を改めて振り返ってみて、津波からの避難行動は、死者が多く生じた事例のみが取り上げられ、事前に避難訓練を行い、その通りに実行して、死者を未然に防いだ事例が取り上げられることは少ないように思う。被害が大きかった事例を取り上げることも、今後の対策を考える上では重要であるが、その一方で、事前の訓練を綿密に行い、施設長のリーダーシップのもとで冷静に避難した事例も、今後の避難行動を考える上で学ぶべきことが多い。特に、今回取り上げる事例は、地元のコミュニティとの結びつきが強く、そのことが避難行動を助けているので、そのことも加味しながら記述する。

2. 方法

今回は4カ所を選定した。1カ所は岩手県大船渡近くのA小学校、後3カ所は宮城県内のB市立保育所、C小学校、D小学校である。

すべての箇所について震災後直接現地へ赴き、責任者からお話を伺った。4事例を分析した後、4事例を総合して事前の訓練の有無、事前に津波を想定していたか、避難経路の模索、施設長のリーダーシップの有無、地域住民の協力の有無を比較した。なお、D小学校については今回の発表場所の地元であることもあり、より詳しく記述分析した。

3. 結果

1 岩手県大船渡市近くのA小学校

2年後(2013年)のインタビュー時には他校に併合になっていた。避難口については震災以前から問題となっていた。ロケーションは、海から200メートルの地点。震災前からずっと避難通路が問題となっていて、市議員(震災前に死亡)がずっと設

置を提唱していた。設置には400万円の費用がかかった。2010年に避難通路は完成し引き渡された。このお陰で避難が3分短縮された。



図1 A小学校避難経路

震災前の3月9日の震度3の地震後に避難橋経由で第1避難場所(三陸駅)まで避難し、津波警報が発令されたため、第2避難場所(南区公民館)へ避難した。避難経路には2箇所不審者対策の鍵がかけられていたが、訓練時並に早く避難できた。子どもたちが締めきらないように見え、「訓練ではない、本番だ」と厳しい声で叫んだ。校長は、子どもたちの最後尾について橋を通過して避難した。駐在さんが「大津波警報が発令された」と知らせた。第1避難場所に着くと全学級が整列してしゃがみ、点呼をとっていた。14時56分に市の防災無線が3メートルの大津波警報を発令を告げ、サイレンも鳴った。校舎内の確認を終えた副校長が登ってきて「第2避難場所へ移った方がよいのでは」と言った。校長は副校長に、「先に行って第2避難場所の鍵の確認をするよう」に依頼。保護者が迎えに来た児童は、学校の危機管理マニュアルに従って保護者へ返した。→後に大きな心配の種になり、検討事項になった。校長が最後尾について、すぐに第2避難場所へ向かった。水は校舎2階まで達し、屋上にまで達した。屋上に2人の大人の人影が見えた。

第2避難場所の公民館には副校長がおり、地域の方が先に鍵を開けたらしい。児童を中に入れ、座布団を敷いた。どんどん波が押し寄せており、さらに津波が高くなる恐れがあると判断し、山の上にある家の取り付け道路の上の方を目指した。公民館から300mほど歩いた道路の行き止まりで2時間近く待機した。公民館に戻る頃にはあたりは薄暗く、寒さが身にしみた。公民館には地域の方が集まり、毛布やだるまストーブが届き、ロウソクが灯された。地域の方が炊き出しをしてくれ、1人1個のおにぎりとおかずのかけうどんを食べた。公民館は地域や保護者の方でいっぱいになってきた。校舎に逃げた大学生2人も到着した。

保護者が次々とやってきては津波の様子を伝えながら児童を引き取っていった。情報源がない中、有益な情報だった。

10人ほどの児童と全職員が地域の方とともに一夜を明かした。

校長は地域の方の車で12キロ離れた自宅へ一時帰宅。バイクで教育委員会へ行った。地区本部に「全員無事」の報告ができた。

2 B市立保育所 当時の所長にインタビュー

保育所のロケーションは海から300m、川から200mの位置。園長地震時約50人の子どもがいた。各家庭に配布される市の「保育所のしおり」は、震度5以上の地震と津波の発生時は保護者が子どもを迎えに行くことと定めている。避難訓練は毎月行っていた。避難訓練をするときに、緊急連絡用児童カードという、メガホンとラジオといろんなものが入ったリュックを必ず背負って持って、訓練をしたので、自然に体が動いてそれはちゃんと持っていった。保護者の多くは、市のしおりに従って保育所を目指した。保育所に向かう途中、母親ら5人が犠牲になったほか、子どもを受け取って避難した後、第1波が引いて自宅に戻るなどした親子3組が津波にのまれた。坂道を上がって1.8キロあった。3グループに分かれて、一番最初のグループは副所長を先頭にして、大きい道路を行って、避難車という古い乳母車のでっかいやつ、お散歩車。それに小さい子とか乗せたり、先生たちおんぶしたりしたので、この道路を行って、上がって行った。I保育所に避難しますっていう紙を貼って、K保育所からK小学校の前を通り、ぐるっと石高の前を通過して、石巻保育所に行く。ここで4時頃にみんなと会うことができた保育所に残って避難した子ども約20人は約35分で山に避難を終え、全員が無事だった。



図2 B保育所津波時の避難通路

3 C小学校 当時の校長にインタビュー

地震の防災訓練では、いつも高台(海拔56メートルの山)に逃げる訓練をしていた。いつもは海拔40mの女子高で2次避難完了。6時間目の授業中で6年生は体育館・3階ランチルーム・校庭の3カ所に分かれ、奉仕作業中に地震が発生。

第1次避難 体育館から校庭へ避難。人数確認。防災無線で「大津波警報が発令されました。高台に避難してください」と放送があった。

第2次避難 ランドセルやジャンパーは置いたまま、6年2組が先頭で卒業式で歌う歌を歌いながら高台へ避難。

雪が降ってきて寒く、ジャンパーを着ていない女の子が寒かったため、持ってくるべきだったとちょっと後悔。

震えていたおばあさんと一緒に避難。

海拔40mのところ市立の女子高校があったが、教頭から「今日は公園まで行くように」と言われていたため、海拔50mの公園まで上った。地域の人も車で沢山来ていた。

雪が降っていたため教頭が指示したようで、男性教員がブルーシートを持ってきていた。テント代わりにし、下級生を入れた。まだ津波は来なかった。6年生が低学年をトイレに連れて行った。甘える低学年も6年生に頼んだ。ゴーという音とバリバリという音がし、「先生、津波来てる」という声で海を見るとガレキや車が流されるのが見えた。ほとんどの子どもがブルーシートの中に入れて津波を見なかった。津波を見た6年生女子は「私の家が流されている」と泣いた。男子も「映画よりすごい」と言った。



図3 C小学校 津波時の避難通路

4 D小学校 当時の校長にインタビュー

・どのような判断で避難したか

学校は海から200-300メートルしかない。自分では屋上への避難を考えた。レッドゾーン(津波危険地域)に入っていたから、被害が出ることはわかっていて。シミュレーションでは最短3分で津波が到達する場合があります、どうにもならない。隣にある保育所は、小学校の屋上に避難することになっていた。



図4 D小学校 被災の様子(当時)

事前に津波注意報が出るたびに宇津野高台へ避難したが、避難完了まで10分かかった。地震発生から津波注意報・警報の発令までに5分以上かかる。地元の先生たちは高台への避難を主張した。「屋上はありえない」という主張があり、避難場所を高台のままにしておくか、2年間議論を続けた。屋上への避難はみんなが反対した。

チリ地震の津波はそれほどこなかった。消防署では、「津波が来ても2階までしかこない。屋上なら完全に安全だ」という証言がとれた。しかし、「津波が来て孤立した時、何日間も子どもが過ごすのは無理。最悪の時に3次避難ができないという議論があり、議論は平行線。

地震があった時に校長が判断する形になった。地震が来たのはその2年後であった。管理職としてはマニュアルが決まっていなくて落ち着かない。地震の1週間前にメールを送る前に地震がきた。屋上に逃げているなら全滅だった。地震発生時に教頭が歩けない状態で地面に手をついていたため、高台への避難しかなかったと思った。2年間話し合っていて、「屋上も危ないかも知れない」と思った。地震が大きいため、教頭と話し合うまでもなく、高台へ避難することにした。宇津野高台には15時前には着いた。いつものとおりの海だったので「空振りか」と思い、「車をとってくればよかった」と思った。その時、1人の先生を帰してしまった(その後は不明)。海を見ていた時に防災無線が入りだして、15:20くらいに潮位が変化したように見え、その後に壁みたいなものが近づいてきて、「あれじゃないか?」という声が出た。15:26に海岸線に津波が見え、ものすごい音がバリバリした。国道のあたりまで水が来たときに、「これもしかすると、ここまで来るかも。ここも危ないのでは」ということになり、3:28には宇津野高台から五十鈴神社へ上がった。津波は15:30に高台に到達した。一緒に居たおじさんが写真を撮っていた。



図5 D小学校 避難経路

・高台での行動

高台に着いてから、消防団の人たちが校長にヘルメットとハンドマイクを渡してきた。校長は「俺なの?」と思った。消防団の人たちもよく知っていて、外の人が指示した方が従いやすいと思ったようだ。「1年生から順番に上がれ」と言って神社に上らせ、残っている人たちにも上るように言ったが、上がらずに写真を撮っていた人もいた。車の中の老人を助けていて、その人は高台の家の2階に避難して助かった。宇津野高台は20メートルくらいの高さで、D中学校と同じ高さ。「D中学校まで行った方がよいのでは」という意見もあったが、距離が400メートルあったため、やめた。宇津野高台は絶対に安心と言われていて、江戸時代にも津波が来ていないと言われていた。

神社に避難してからも、「もっと大きな津波が来るかも知れない」という話があった。あばら骨を折った人や酸素ボンベを使っている人、保育所の子どもたちもいて雪も降っていて約170人が逃げるのは無理だと判断した。行った人もいたが30分くらいで戻って来た。

トイレに困り、神社の右側を男子、左側を女子としたが、右側は昔ご神体があった場所だからだめだと言われ、左側を女子と分けた。子どもたちを神社の社の中に入れるかどうか迷った。つぶれるかもしれないと思った。

病人・保育所の子ども、1~4年生まで入れたが、ギューギュー詰めだった。つぶれなくてよかった。5~6年生は境内でたき火をして一晩明かした。たき火は2時頃なくなったが、地域の人が、津波で流された高台の家の柱を土台から外して持ってきてくれたため火を吹き続けられた。外(境内)の避難者は一睡もしていない。トイレも大変だった。食べるものがなく、子どもたちだけにみかん2房とチョコレートを配った。

6年生の担任が「9時からキャンプファイヤーだ」と言ってたき火をしたり、星座の観察会もやった。地域の人たちがいろいろやってくれたお陰で先生方が子どもたちについていられた。たき火の火は、お父さんたちがライターを持っていたため、すぐに点いた。

・翌日(3月12日)の状況

次の日に中学校へ行った。大津波警報が出ているときに15分間平地を歩いた。教頭先生には朝一番で中学校まで行って様子を見てきてもらい、消防団の人を連れてきてもらった。消防団の人がずっとついてくれた。この人は向いの志津川から津波で流され、流れ着き、中学生が蘇生して助かった人で、案内をしてくれた。教頭先生には2往復してもらい、小学生を探しに来る親のため、もう一晩宇津野高台で野宿してもらった。親は数名だったが探しに来た。筆記用具は1年生の自由帳しかなく、置き手紙もできなかった。後に教頭先生は戸倉中学校から松島自然の家へ転勤した。校長先生は多賀城市から通勤していた。家は無事だったが、家族とは1週間連絡がとれなかった。中学校では1泊した。中学へ行く前に次の避難先として3方向を考えていた。

①荒町(横山へ向かう方向)から12日の早朝におにぎりが届いた。被害がなく、行けば食べられると思った。歩くとも1時間少しかかるし、ガレキの山があり、子どもたちには無理だと判断した。

②宇津野高台にある家の2階への避難も考えたが、食料がなか

った。

③自衛隊が中学校へ来ていたが、食料の保証はできないと言われた。校庭に遺体があり、子どもたちには見せられないと思った。ここに長居はできないと思った。その時に脱出の算段をした。

・翌々日(3月13日)の状況

次の日(13日)に登米から消防団が助けに来てくれた。道を作り、川に橋をかけながら来てくれた。中学校から10時に出発し、荒町まで行くとミヤコー(宮城交通)のバスがボランティアで来てくれ、登米市まで避難した。荒町から登米市まではバスが通れた。ガレキのひどいところは気仙沼線の線路を歩いた。中学校での1泊の方がたき火はなく、寒かった。体育館は全壊で、33人が校舎の2階にいた。このとき、校庭ではたき火をしていたが、校庭のネットの上の方に女性の遺体があったため、子どもには見せられず、校庭には出さなかった。中学で保護者へ返した子もいた。山沿いに帰る人たちには返した。寺浜は漁業をしていて片付けがあったが、食べ物がないため、1週間預かった子もいた。中学校にも地域の人が避難していて、皆さん登米まで行った。

児童の名簿をカレンダーの裏に書いて、中学と荒町の集会所にも貼った。登米では登米(とよま)中学校の体育館に避難した。食料があると聞いて人が増えてきた。志津川方面から来た人もいた。途中から小学校の児童と中学校の生徒は4月10日頃まで体育館から校舎の図書館へ移動して暮らした。他の廃校から机を集めて4月13日頃から旧善王寺小学校(廃校)へ移った。

・中学校での生活

初めの1週間くらいは体育館にいた。仕切り無しで入り乱れて暮らしていたが、小・中学校の場所と西郷地区、水戸部地区、折立地区と他地区の連合のように分けて、仕切りを作った。登米市が避難所運営をしていて、地区ごとに責任者を立て、朝昼晩に打ち合わせをしていた。風呂と調理とトイレ掃除を当番制にして分担していた。リーダーを中心にまとめ、うまく回っていた。登米市が手伝ってくれていて、「自立した回し方ができるように」というのが助かった。被災者が運営していたため、心の負担が大きかったと思う。南三陸町ができる前の郡には登米市になっている地域も入っていて、もともと交流のある地域だった。小学校へは今年の4月に移った。

・NPOによる援助

ホームページで知ってもらって学校の備品を提供してもらったりした。また、WVというNPOが、中学校にいる時に声をかけてくれ、「欲しい物を何でも行って下さい」と言ってくれた。自然の家に分校を作って、登米市にも作ればいいと考えた。そのためには事務用品が必要で、「コピー機をくれるの?」と聞いたらくれると言われた。子どもたちの遊び相手になってくれるため、遊び道具を持ってきてくれた。アメリカに行っていた30代の女性がいたが、きちんと約束を守ってくれた。また、1年間バスを出してくれた。

「小学校ができるなら通わせたい」と地域が言っていて、WVも「教委がよいと言ったらバスを出す」と言ってくれた。結局、バスは5月10日に運行を開始し、3方向から出してくれた。未確認情報だが、断った他の学校もあったらしい。途中から国が出した。

・児童の様子

WVは子どもたちの扱いに慣れた人たちであった。避難所へ帰す方が子どもたちのストレスになるため、17時までは学校が面倒をみることにし、学校にいる間の遊びの部分をWVに託すことにした。遺体を見た子もいて、1学期には荒れた。学校では普通だったが、WVの人に暴言や暴力をふるったり、死にたいとか私なんかいない方がいいと言った子もいた。2学期には止んだ。WVにはカウンセラーの資格をもった人もいた。今は放課後の遊びを保護者がやってくれている。

小学校ができるようにして欲しいというところで町との間で関係がこじれた。中学校との統合の問題があった。善王寺小に残れないかというのがあった。登米の人との交流が相当あった。4月1日に戸倉へ移った。

善王寺小では子どもたちがPTSDにならないように1年間気を遣った。11月にアンケート調査をし、結果も出た。分析はカウンセラーとWVと学校で行った。気になる子や親との関係についてもケース会議をやった。

このD小学校は、校長を始め、全学をあげて津波避難について考えてきているが、それに加えて、地元の人々の協力や、学校が地元の人々の意見を聞き入れるなど、地域と学校あげて、子どもたちや地域住民を守るという姿勢が顕著に見られる。また、南三陸(海側)と登米市(内陸側)との常日頃の連携体制も効を奏している。

表1 事例まとめ

	事前の訓練	津波を想定	避難経路の模索	施設長のリーダーシップ	地域住民の協力
O小学校	○	○	○	△	○
K保育所	○	○	○	○	○
K小学校	○	○	○	○	○
T小学校	○	○	○	○	○

O小学校のリーダーである校長は、震災時近隣の大学の卒業式に出席しており、避難は副校長が対応した。

O小学校(A)、K保育所(B)、K小学校(C)、T小学校(D)いずれも津波を想定した訓練を日常的に行っている。施設の長のリーダーシップも見事であるが、組織としてのバックアップ体制も十分にできている。

4. 考察

今回取り上げた4ケースでは、事前の準備、避難計画、リーダーシップ、機転の利いた計画の変更、地域性を重視した地元民との連携などいずれも優れたものであった。

今回のケースは、いずれも避難に関しては、素晴らしい行動をしたということで有名になり、震災直後は施設の長は各地で講演に呼ばれている。しかし、その後マスコミの取り上げたのは、被災者が多くなくなった悲劇的なケースと、その責任を追究するものであった。一方避難この4つの事例でも、児童を引き渡して死亡したケースもあった。児童の引き渡しに関しては、ケースバイケースでどちらがよかったのかは不明である。今回のケースのように、当たり前のことを当たり前に行動したケースこそ繰り返し取り上げるべきことであると考える。